

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】 櫻間瑛

【所属】(助成決定時) 北海道大学大学院文学研究科

【研究題目】

「ロシア連邦沿ヴォルガ中流域における、民族・宗教関係についての民族学的研究」

【研究の目的】

本研究は、ロシア連邦沿ヴォルガ地域を対象に、その内部の民族・宗教関係を明らかにすることを目的とした。当該地域は、長きにわたって、ロシア＝正教文化、タタール＝イスラーム文化、フィン・ウゴル＝異教文化が接する地域として知られている。また、ソ連＝社会主義という時代を経験したことによって、独特な近代化、文化の発展が起こっており、現在もその影響は色濃く残っている。

本研究は、その中でもクリャシェンという集団に焦点を当て、その民族文化の在り方、宗教実践の様子を観察しつつ、その自己認識の在り方を明らかにすることを目指した。それによって、旧ソ連圏における地域研究としては、ポスト社会主義の文脈における、人々の民族的・宗教的なアイデンティティの在り方・その変容について明らかにすることを目指した。また、より一般的には多文化・多宗教空間において、集団間の関係がいかんにして構築されており、そこにどのような葛藤が生じているのかについての事例を提供することも目的であった。

【研究の内容・方法】

本研究では、先述の通り、クリャシェンと呼ばれる人々を取り上げ、その民族文化、宗教実践の変容を中心に、彼らの民族意識・エスニシティの発現の在り方について考察を行った。このクリャシェンとは、しばしば受洗タタールとも呼ばれており、ムスリムが圧倒的多数を占めているタタールの中の、ロシア正教を受け入れた人々として知られている。特に、帝政期の改宗政策の結果、ロシア正教を受け入れた人々の子孫とみなされることで、ペレストロイカ以降の民族・宗教復興の潮流の中で孤立する結果となった。そして、一部の知識人は、自分達はタタールとは異なる民族であると主張し、国勢調査の際に大きな論争を引き起こすこととなった。実際、民族学においては、クリャシェンの間には古代から続く、独自の民俗や習慣が残っていると指摘されている。

本研究は、歴史人類学的な研究として、歴史学的な文献研究と人類学的な現地調査を組み合わせることで研究を進めていった。歴史的な側面については、帝政期の宣教師の記録、及び各種の民族誌、またソ連期の民族誌を分析することを通じて、かつての人々の宗教への帰依・実践がいかなるものであったのか、またどのような視線があったのかについて分析した。それを背景に、実際にクリャシェンの居住する村落へと出かけ、そこで行われている宗教実践、民族文化の表象の様子を観察・分析した。

宗教実践については、特に教会への参加の様子、キリスト教受容以前の信仰に基づくとされる儀礼がいかに行われ、それに対してどのような意見が存在しているのかを取り上げた。また、民族文化の表象の様子については、各村の学校や博物館、アンサンブルにおける活動を描写した。さらに、この活動の延長上に置くことのできる、クリャシェンの民族的な祭りとして知られているピトラウがどのように行われ、その中でどのようにしてタタールとの差異が示されているのかについて考察を行った。

このような作業を通じて、ポスト・ソ連社会という文脈の中で、クリャシェンというエスニシティがいかにして意識され、現れているのかを明らかにした。

【結論・考察】

本研究では、クリヤシェンというエスニシティを通じて、いまだにソ連時代に形成された民族観・宗教観が大きな影響を残していることを明らかにした。ソ連期には、宗教は基本的に攻撃の対象であり、教会などの施設が破壊されたほか、宗教実践も基本的に制限を受けていた。ペレストロイカ以降の宗教復興という潮流も、人々が自分の宗教への所属についての意識を高めたものの、教会へ通うなどの具体的な実践には必ずしも結びついていない。ソ連期においてより重要な意味を有していたのが、民族であり、それを支えるものとされた文化であった。現在のクリヤシェンの復興運動も、ムスリム・タタールとの関係において、基本的な差異の指標としてあるのは宗教であるが、あえてそれを前面に出すことは避け、民族文化の側面を強調するようになっている。その点で、この運動が目指しているのは、文字通りの復興ではなく、ソ連的な意味での民族として、自分達の存在を完成させることであると言える。今後は、他の地域における近代化に伴う変容の問題と照らし合わせていくことで、この社会主義の変容がもった意味について、より位置づけを明確にすることなどが必要と思われる。